

## 室戸台風、大阪での暴風・高潮の被害

—小学校の倒壊、ハンセン病外島保養院の流失—

長尾 武\*

## I. はじめに

大阪城外堀の南西、大手門前公園に高さ30メートルの教育塔が建っている(写真1)。この塔は学習時間中に不慮の災害で亡くなった児童・生徒、教育に殉職した教員の霊を祀り、災害に際して発露された師弟愛を永久に伝えるために建立されたのであった。大阪城を何度か訪れた人ならば、誰でも知っている一際目立つ建造物である。

しかし、この塔が室戸台風によって大阪をはじめ関西の多数の学園に甚大な被害を与えたことがきっかけとなり、その災害の2年後に建立されたという事情を知っている人は少ない。

昭和9年(1934)9月21日、瞬間最大風速60m/sec.以上の超大型台風が近畿地方一帯を襲い大被害をもたらした。中心気圧が室戸岬で684耗(911・6ヘクトパスカル)、当時の世界最低記録(インドのフォルス・ポイントでの689耗2)を破ったことから、室戸台風と名付けられた。

室戸台風は北海道を除く日本全体に被害を与えたが、大阪府・兵庫県・京都府の関西3府県の被害が大きかった。大阪湾には高潮が押し寄せた。大阪市は暴風と高潮による浸水によって、特に大きな被害を受けた。

室戸台風による被害の中で、悲惨だったのは多数の学校が倒壊し、多くの児童・生徒が校舎の下敷きとなって圧死、教員が殉職したことであった。また、大阪市西淀川区の大阪湾岸にあった、ハンセン病・外島保養院が倒壊・流失し、多数の患者・職員が死亡・行方不明となったことであった。大阪市内の小学校児童・職員の死者278名とハンセン病外島保養院関係死者・行方不明者187名とを合わせると465名で、大阪市の死者・行方不明者総数990名の47%を占める。

本稿では、室戸台風によって、なぜ、小学校、外島保



写真1 教育の塔

養院で、これだけ多数の犠牲者が出たのか、また、その後、災害の教訓がどのように生かされたか、さらに、残された問題についても述べよう。

## II. 大阪市、小学校の被害

## 1 大阪市、小学校被害のあらまし

第1表に示すように、大阪市内で全潰・半潰・大破した校舎は小学校176校、幼稚園31校、中学校12校、計219校である。なかでも小学校については最も被害が大きく全市244校の約72%までもが全潰・半潰・大破したのであった<sup>1)</sup>。

室戸台風の上陸によって大阪で暴風が吹き荒れた時間は7時40分～9時頃であり、多くの児童・生徒が登校していた。その為、校舎倒壊によって甚大な死傷者が出たのであった。

小学校で被害を免れたのは、全校舎鉄筋コンクリート

\* 大阪市阿倍野区天王寺町南3-8-9

建築の31校、及び昭和3年(1928)以降の耐震の最新式木造建築の35校、計66校であって、これらを除く旧式木造建築の176校(他に4校は工事中に被災)は何れも倒壊または大破の被害を受けたのであった<sup>2)</sup>。なお、昭和3年以後の建物であっても、津守第三(昭和4年)は全壊、野里(昭和3年)、城東高(昭和6年)は半壊、難波河原(昭和3年)が大破している。これらは、新しい建物ではあるが、構造上問題があったと考えられる。小学校内での児童の死亡269名、重軽傷1873名、職員の死亡9名、重軽傷133名であった<sup>3)</sup>。

学校内での保護者の死傷もあり、死者9名、重軽傷者86名であった。子供たちが学校へ出かけた後、風が激しくなり、暴風雨の中を保護者が子供を学校へ迎えに行き、学校の中で災害に遭遇したのであった。登校途中で

第1表 大阪市内の小学校の被害(『大阪市風水害誌』91頁)

全潰	半潰	大破	児童死亡	職員死亡	児童重軽傷	職員重軽傷
28校	71校	77校	269人	9人	1873人	133人

全潰・半潰・大破を合わせると176校、ただし、他に4校が工事中で被災した。

の被災者もあったと思われるが、この数は含まれていない(第1表)。

## 2 全潰校舎があった小学校と児童・職員の死傷者数

大阪市内の小学校で全潰校舎があったのは28校であった。それらの学校の児童・職員の死傷者数、校舎の建設年等を第2表に示した。

この表から、次のようなことがいえる。

第2表 全潰の校舎があった学校(『大阪市風水害誌』151～152頁)

各小学校の所属区は現在の区とは異なっている。

学校名	児童数	創設年月	構造	死亡児童・職員	重軽傷児童・職員
済美 第五(北区)	1671	昭和4、8	木造	—	—
曾根崎(北区)	1560	明治43、3	木造	—	1
西九条(此花区)	2403	明治38、5	木造	—	4
桜島(此花区)	480	大正12、12	木造	5	8
味原(東区)	1090	大正11、5	木造	18	93
花園(西区)	634	明治40	木造	—	—
九条第一(港区)	1031	大正2、12	木造	—	—
泉尾第三(大正区)	920	大正15、7	木造	—	—
北恩加島(大正区)	1393	大正10、6	木造	9	17
天王寺第一(天王寺区)	1342	大正8、10	木造	—	—
天王寺第四(天王寺区)	1111	明治42、10	木造	—	—
天王寺第五(天王寺区)	1712	大正2、3	木造	7	66
天王寺第六(天王寺区)	1169	大正9、7	木造	—	—
鷺洲第一(西淀川区)	2240	大正11、5	木造	5	26
鷺洲第二(西淀川区)	1526	大正13	木造	—	—
香蓑(西淀川区)	884	大正8、5	木造	—	6
啓発第二(東淀川区)	1911	昭和2、3	木造	—	7
大隅(東淀川区)	274	昭和2、3	木造	—	—
鶴橋第二(東成区)	1742	大正7、5	木造	68	192
中本第三(東成区)	1620	大正8	木造	—	—
鯉江第二(旭区)	1367	大正4、7	木造	23	61
鯉江第三(旭区)	1032	大正9、3	木造	33	169
榎本(旭区)	1208	明治42、1	木造	—	—
丸山(住吉区)	1699	大正8	木造	—	—
敷津(住吉区)	334	明治44、10	木造	—	4
敷津第二(住吉区)	345	大正7	木造	—	—
南百済(住吉区)	1012	大正11	木造	1	3
津守第三(西成区)	792	昭和4、5	木造	—	1

- ①全潰校舎は全てが木造であった。
- ②創設年月とは校舎が完成した年月であると考えられるが、最も古い校舎で明治38年であり、築29年で決して老朽というほどでない。最も新しい校舎で昭和4年、築5年であった。新しい校舎でも全潰があったのである。
- ③全潰校舎があった学校で、死傷者があった学校は15校、怪我人一人も出さなかった学校は13校であった。校舎が全潰で多くの死傷者が出た学校があり、他方では一人の怪我人も出さなかった学校があった。この違いは何によるのだろうか(第2表)。

(1) 死傷者が多かった学校と、一人の怪我人も無かった学校の相違点

A 校舎が倒壊し、多くの死傷者が出た小学校  
鶴橋第二小学校

大阪市内の小学校で最も死傷者が多かったのは鶴橋第二小学校で、死者は児童67名、職員1名、重軽傷者は児童188名、職員4名であった<sup>4)</sup>。南校舎・北校舎が倒壊し、200～300名が下敷きとなった。

芦田基男先生の記録が『大風水災学園美績』に所収されている<sup>5)</sup>。資料1はその要約である(芦田基男先生は校舎の倒壊によって重傷を負った)。

資料を読むと、芦田基男先生が精一杯児童を守ろうと努力していたことがわかる。絶対安全と思われる避難場所も無いことから、先生は教室の机の下に伏せさせることしか児童にさせることが出来なかった(地震や火災の際には運動場へ避難するが、暴風で瓦などが飛び交い、外に出すのは危険に思われた)。他のクラスでは担任の指示で新校舎に移動したクラスもあった。管理職からの指

示・連絡も無かった。当時は天気予報に対する注意も薄く、早朝出勤の指示がなかったので、職員は8時30分始業に合わせた平常通りの出勤であった。7時30分を過ぎ、風が強くなっても出勤していない教員が多数あり、芦田先生は1人で両隣のクラスを見なければならなかった。先生は自分の体が十も二十も欲しいと思った。おびえている児童のそばを離れられず、職員室へ指示を聞きに行くこともできなかったのである。結果、多くの児童が死傷し、芦田先生も重傷を負った。

B 校舎が倒壊したが、一人の怪我人も出さなかった小学校

天王寺第一小学校

校舎が倒壊したが、児童を鉄筋校舎の講堂に避難させて、一人の怪我人も無かった。

木造校舎が倒壊したが、鉄筋校舎内に講堂があり、全児童を避難させることができた。

当時の新聞(大阪新聞、1934・9・21)に「児童700名が集団的に避難・全市で最も被害が多くて、負傷児のなかった原因は何?」という見出しで大きく報じている<sup>6)</sup>。その記事を要約してみよう。7時頃には校長以下ほとんど全員の教員が出勤していた。7時30分頃から風が強くなり、校長が玄関に立ち登校してくる児童を鉄筋校舎に誘導し、すでに木造校舎に入っていた児童には鉄筋校舎へ移動するように、隣の教室へ次々に伝言させた。移動が完了して3～4分後、木造校舎が倒壊したのであった。

校長のリーダーシップの下、職員全員が協力して速やかに児童を避難させたのである。これは、日常の訓練の成果ともいえるだろう。

資料1 芦田基男先生の記録(『大風水災学園美績』101～104頁)

芦田基男先生は校舎の倒壊によって重傷を負った。原文を省略したり、意味が分かりやすいように加筆した部分がある。

二年生の担任だった芦田先生は当日、七時過ぎに登校し(始業は8時30分)、教室に駆けつけた。両隣の教室には担任の姿は見えなかった。風速が強まり、教室の南側のガラス窓が激しく揺れていたため、生徒たちを北側に座らせた。その後、風速はさらに強まり、屋根瓦やトタン板がビラのように飛散しはじめ、かつて見たことのない大自然の暴威が事実として窓外に見え出した。校舎の揺れが激しくなり、散ってくる瓦は窓を破った。危険を感じて全児童を机の下に入れた。これで良いのか。職員室へ行って指令を聞こうか。そんな余裕も無かった。また、荒れ狂っている運動場へ連れ出す勇気はとて起こらなかつた。その時、二階の上級児童が悲鳴をあげて隣の教室へ雪崩れこんできた。芦田先生は廊下へ出て、大声で「机の下に入れ」と叫んだ。先生は教室の境界に立ち、言い続けた。次に、西隣の教室へ駆けつけると、子供の身を案じて、学校に駆けつけた林夫人(保護者)が一生懸命に怯えている子供たちに注意されている。風威の増大につれて、「ウワー」と泣き叫ぶ子、「助けて」と叫ぶ声。そうして立ち上がろうとする。ガラスが物凄く割れる。自分の体がもう一つ欲しい。十も二十も欲しい。大きく揺れ動く校舎の中を先生は西に東に、最後に彼は教室と教室の境界に立った。寸時も早く風の止むことを祈った。

突然、大音響が起こり、南側の校舎が倒壊した。砂塵と木屑が一面に舞い上がって窓を打った。児童はおびえて、叫び声をあげて立ち上がろうとする。「危ない!」と、飛び出してきた一児を抱き止めて教室へ連れ込んだ瞬間、南側の柱が、ぐっとおし寄せて来たと思うと同時にぐわんと身に衝撃を受けた。うむとうめき声が聞こえてきた。先生はようやく意識を取り戻した。全児童は?児童はどうした?起きよう、起きて助けを呼ぼうと思ったが、すでに右手は役に立たなくなっている。不意に後方で助けを呼ぶ子がある。話してみると怪我はないらしい。自分の体を支えていた左手を肩に廻して、導いて前方の破目からののがれさせた。やがて近づいて来る救援の足音が聞えた。先生はもつれた声をしぼって、児童の状況をしらすと共にその救助を求めた。それが終るや、はりつめた気のゆるみと負傷のために意識はまたぼんやりとうすれていった。先生の傷は、右鎖骨と腰椎の一部を砕かれ全身数ヶ所に打撲傷を負った。

第3表 大阪の気象状況の経過と2つの学校の対応  
 参考文献『大風水災学園美談』101～104頁、『大阪新聞』1934.9.21、『天王寺』14頁。

大阪の気象状況	学校の対応 (倒壊した鶴橋第二小学校の場合) 教員の手記	学校の対応 (鉄筋の校舎があった天王寺第一小学校の場合) 大阪新聞・当時の教頭の回想記の 2つの資料による。
7時、気圧967.3mb、 風速12.6m/秒。	7時少し過ぎ、登校。 直ぐに担当クラスへ行く。 生徒を北側に座らせる。	校長はじめ、ほぼ全員の職員が登校。 教頭が火種を消す。校舎を巡視。
7時30分頃から風は次第に強まる。	両隣のクラスの先生はまだ来ていない。	
7時40分、17～18mの烈風となった。	校舎が動揺し、瓦が窓を破る。生徒を机の下に入れる。職員室の指令を聞きに行く余裕がない。	校長の指示で木造校舎の児童を鉄筋校舎の講堂に移動させる。隣の教室へ校長の指示を伝言した。
7時55分、最低気圧954.4mb。 猛烈な暴風となる。	2階の生徒がなだれ込んで来た。机の下に入るように指示する。校舎が物凄く揺れ、ガラスが割れる。 隣室との境に立ち、風が鎮まるのを祈る。	校長・使丁が玄関に立ち、登校してきた児童を鉄筋校舎の講堂に入るよう指示する。 教頭が2回校内を巡視、居残り児童がいないか確認。
8時3分、瞬間風速がダインス 風圧計で60mを越える。	南側校舎が倒壊、北校舎も倒壊。柱の下敷きとなり、気を失う。 死者、児童67名・職員1名、重傷、児童188名・職員4名。	御真影を講堂に移動。 木造校舎が倒壊する。 一人の怪我人も無かった。

しかし、もし、鉄筋校舎が無く、木造校舎だけであったなら、安全な避難場所が無く、多くの児童が校舎の下敷きとなって、圧死した可能性も否定できない。

#### (2) 大阪の気象状況の経過と2つの学校の対応

校舎が倒壊し、多数の犠牲者が出た鶴橋第二小学校と校舎が倒壊したが鉄筋校舎を持ち一人の怪我人も出さなかった天王寺第一小学校の二校の台風への対応について、第3表にまとめて比較した。

台風当日の朝、鶴橋第二小学校では、職員は平常通りの勤務であったが、天王寺第一小学校では職員の本ほとんどが7時頃に出勤していたということである。前日の15時に警報がでていたということで、早朝出勤の指示があったと思われる。7時30分頃から風が強まり、天王寺第一小学校では校長が児童全員を鉄筋校舎内の講堂に避難させるよう指示をだした。この指示は教室から教室へ順次、速やかに伝達された。施設面では耐震・耐風・耐火の鉄筋校舎があり、災害の場合、鉄筋校舎内の講堂に避難するという事前から訓練がしっかりと行なわれていたと思われる。さらに、校長を中心とした職員集団が一致協力していたのである。

他方、鶴橋第二小学校では、警報に対する職員の意識(個々の職員を言っているのではない)が薄く、平常通りの出勤だったのである。風が強まってきた7時30分頃から、早く出勤していた少数の教員で生徒を指導せねばならなかった。彼らは精一杯がんばったのであるが、管理

職からの適切な指示も無く、職員集団の取り組みが出来ていなかった。しかし、最大の問題点は、児童の安全を確保できる耐震・耐風・耐火の校舎が無かったことである。台風で校舎が倒壊するとは誰も予想できなかった。強風で校舎の外に避難するのは危険であり、校舎内に止まらざるを得なかったのである。

#### 3 脆弱な学校建築への批判

大阪市では全市小学校244校の70%以上の学校の校舎が全壊・大破した。脆弱な学校建築に対して、各方面から監督官庁の責任を問う批判の声があがった(『大阪朝日新聞』9月23日)。

##### 建築協会からの声明書

多数の公共建築物が倒壊したが、中でも、小学校校舎があまりにも脆弱で、多数の児童が犠牲となった。「学校倒壊の責任は監督官庁が責任をおうべきである。」

##### 赤木社会局長官

「近畿地方風水害惨状視察したが、倒壊建物中最も目立ったのは小学校であるが面積の大きい建物でありながら柱が少い。金を節約してどちらかといへばお粗末であった。」

##### ・学校建築はどうあるべきか

埴岡桜宮小学校校長は学校建築について論じている。以下の3点に要約した(『大阪毎日新聞』9月23日)。

①学校は児童が安心して登校出来るところであらねばならない。

②非常の際には付近の住民の安全な避難場所であらねばならない。

③そのためには耐震、耐火、耐風、耐水の完全な鉄筋コンクリート建のように非常に堅牢な建物であるべき。関東大震災以後東京、横浜などの小学校は全部鉄筋コンクリート建となったが、大阪でも是非そうして葺きたい。

#### 4 暴風警報が出されたにも拘らず、なぜ多くの児童が登校したのか？

室戸台風の進路を第1図に示し、第4表には、室戸台風の進路に対応して、大阪での気象状況や天気予報・警報等を記載している。これによれば、大阪では暴風警報が20日午後3時、21日午前2時45分、二度も出されている。それなのに、なぜ、多数の児童生徒が登校したのか？ 当時は現在とは異なり、警報が出されても必ずしも学校が休校にならなかったのである。

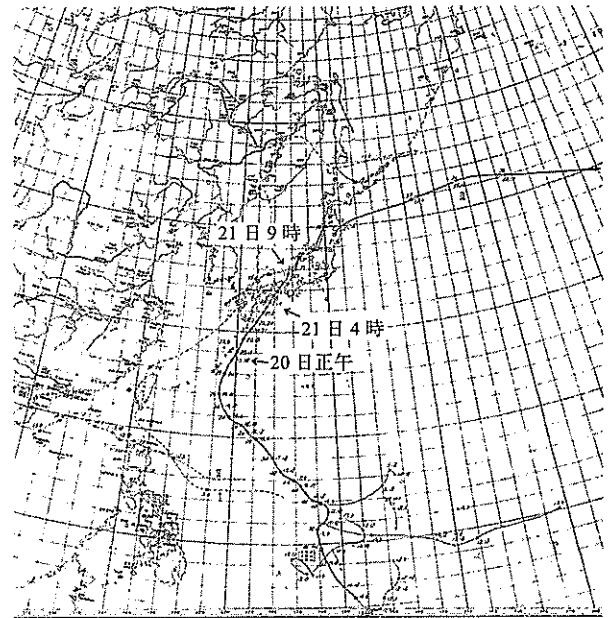
堀口由己は警報が出されたにも拘らず、人々の注意を喚起できなかった理由について次のように述べている<sup>7)</sup>。

当時の暴風警報は漁船や船舶、港内の警備等、海上活動に対する安全対策が主な目的であった。暴風警報は海上活動に影響が出る風速10m/秒以上になった場合に発令された。しかし、風速10m/秒では陸上に対しては、ほとんど損害を与えない。この程度の風速を目安にしていた為、暴風警報が頻繁に発せられた。そして、海上活動に対する警報が、そのまま陸上にも適用されていたため、一般市民が警報に対して注意を払うことが少なくなっていたのである。

さらに、一般市民が警報に対して注意を払わなくなったもう一つの理由について、当時、大阪測候所に勤務し、20日～21日、二度の警報発表に関わられた辰巳善之助は次のように述べている<sup>8)</sup>。

当時の大阪には、气象台支台と測候所の二つの気象機関があって、共に予報を出していた。両者の予報が違っていると、小新聞では、大きな見出しで「气象台は雨、測候所は晴、さてこの軍配はいずれに揚るか、明日のお楽しみ」と囁かされたという。警報などを出す場合は空騒ぎになるのを恐れて特に慎重になり、確実性を保持するために近府県より遅れがちになったという。

大阪測候所は20日正午の天気図により、近畿地方が暴風圏に入ることが確実となり、同日15時、「風強カルベシ、全管内ヲ警戒ス」という警報を出した<sup>9)</sup> (第1図)。



第1図 室戸台風の進路、『室戸台風調査報告概況』に所収の付図、「室戸台風の経路其他」に加筆して作成。

しかし、气象台支台は同日、21時40分のラジオ通報で「台風ハ今夜半宮崎沖カラ豊後水道へ明朝内地西部ヲ経テ午後日本海ニ出ル見込ミ、大阪ハソノ余波デ明日午後南西風ガ十五米以上ニ達シマショウ」と発表した。台風は豊後水道を経て、中国地方から日本海へ抜けると予報したのであった。大阪での風速が15m/秒以上となる予想だったから、当時の暴風警報の基準を上まわっている。しかし、台風は大阪を直撃するのではなく、台風の影響は激烈ではないと受け取れる報道だったのである。

この支台からの発表を聞いた測候所の辰巳は、夜半になっても雲間から月が見え、台風襲来の兆候もまったく無く、その上、山陰線が豪雨で不通になったという報を受けて、支台の予想通り台風は山陰をめざしていると思うようになり、警報を出したことを後悔したのである<sup>10)</sup>。

しかし、21日2時20分中央气象台から「夜半中心132度31.5度728北東40杆」という電報を受け、2時45分、辰巳は万一無警報で惨害のことを考えるとたまらなくなり、大英断をもって2度めの警報を発表し、朝日新聞市内版に「恐怖の猛台風今朝大阪湾を衝くか深夜更に暴風雨警報！高潮3～4尺の見込」の掲載を依頼して、大阪市民に台風への注意を促したのであった<sup>11)</sup>。

ただし、この新聞の文章では猛台風という見出しではあるが、高潮3～4尺(90～120cm)とあり、その後、実際に大阪湾岸を襲ったO.P.5.1mの高潮に比べてあま

第4表 室戸台風の進路と大阪での気象状況・天気予報（警報）

参照資料

大阪管区気象台『大阪の気象百年』（A）青木滋一『大阪の四季と災害』（B）

藤原咲平『室戸台風調査報告概況』（C）大阪市『大阪市風水害誌』（D）

室戸台風の進路	大阪での気象状況、天気予報
9月20日正午 奄美大島南東約100kmのところを位置し、時速約30kmで進路を北北東から北東に転じた。(D, p65) ※1	20日正午の天気図により、近畿地方が暴風圏に入ることが確実となり(D, p65)、9月20日15時、大阪測候所より「風強カルベシ、全管内ヲ警戒ス」と発表。(B, p68) 第1回目の警報大阪で気圧が次第に下降。(A, p58)
9月21日2時 足摺岬南方約60kmに達する。(A, p58)	9月20日21時40分 気象台支台よりラジオ通報、「台風ハ今夜半宮崎沖カラ豊後水道へ明朝内地西部ヲ経テ午後日本海ニ出ル見込ミ、大阪ハソノ余波デ明日午後南西風ガ15米以上ニ達シマシヨウ」(B, p69)
9月21日5時前 高知県奈半利町（室戸岬の北西24km）に上陸。5時10分、室戸測候所で911.9mbを記録。(A, p58) 風速20分間の平均45m/秒。通信・連絡・電燈が4時過ぎに断たれる。(C, p8)	9月21日2時20分、中央気象台より電報、「夜半中心132度31・5度728北東40km」。(B, p70) 大阪測候所は2時45分、朝日新聞市内版に「恐怖の猛台風今朝大阪湾を衝くか深夜更に暴風雨警報！高潮3～4尺の見込」の掲載を依頼。(B, p70) 第2回目の警報
9月21日6時 徳島市の南西15kmに達する。6時10分、瞬間風速44m/秒。(C, p9)	風速4～5m、しかし、気圧は物凄く下降。(B, p70)
9月21日7時 紀淡海峡に達する。(D, p65) その後、淡路島を縦断。(A, p58)	気圧が急速に下降。しかし、風は弱く、6時・風速6.4m/秒。(A, p59)
9月21日7時55分、兵庫県深江に上陸。(大阪の北西20km)(A, p58)	7時、気圧967.3mb、風速12.6m/秒。(A, p59) 7時10分、大阪測候所は航空気象報「台風720紀淡海峡東北東」を受信し、7時40分のラジオ発表に「コノ大暴風雨ハ後西寄りノ風トナリ次第ニ天気回復スル」ト報じた。(B, p71) 7時30分頃から風は次第に猛烈となる。(A, p59) 7時35分、測候所の電話が不通となる。(A, p59)
9月21日8時30分、京都の北を通過。(A, p58) 9月21日9時、敦賀の西南西20kmの日本海沿岸に出た。(A, p58)	7時55分、最低気圧954.4mb。(A, p58) 測候所の信号鉄塔が倒れる。(A, p59) 8時3分、風圧計のベンが60mを突破する。(60m迄しか測定できない。) (A, p59) 8時5分、測候所の無線鉄塔が倒れかかり、風力計・風圧計・風信器が破壊される。(A, p59) 8時14分天保山検潮所でO.P.5.1mを記録。(D, p71) ※2
	8時30分、974.6mbに上昇。(A, p58) 9時、風速20mに弱まる。(A, p59) 11時過ぎ、風速10m以下になる。(A, p59)

※1 (A) では、「なお北北東の方向を続ける予想がたったので、…警報を発表した。」となっている。

※2 (A) では、O.P.上498cmとある。

りにも低い予想であった。大阪市民は深刻に受け止めなかったと思われる。

その後、大阪測候所は航空気象報「台風720紀淡海峡東北東」を受信した。北東であったら、大阪への影響は大きい、東北東なら、影響が弱いと判断し、7時40分のラジオ発表に「コノ大暴風雨ハ後西寄りノ風トナリ次第ニ天気回復スル」と報じた<sup>12)</sup>。しかし、台風は北東に進み、大阪では大暴風が吹き荒れたのであった。

以上述べたように、暴風警報を出す目安が風速10m/秒以上というような低い基準であったこと、天気予報が

測候所と気象台支台からそれぞれ独自に出され、また、正確に予測できなかったことが、市民の警報に対する意識を薄くしていたのであった。

#### 5 ドイツの新聞紙上で紹介された鯉江第二小学校芦田政次先生

室戸台風による小学校の惨状と児童の救出のために自分の命を捧げた一教員の記録がドイツの新聞『アルゲマイネ・ツァイツング』紙(9月23日刊)に採り上げられた。校舎が倒壊して殉職した鯉江第二尋常小学校芦田政次先生についてである。同校では児童22名・職員1名が

死亡、児童 59 名・職員 2 名が重軽傷を負った。

芦田政次先生は死の直前まで身を挺して児童の救護に力を尽くした。資料 2 に記事を書いている。

以下に、『大風水災学園美績』に所収されている記事の翻訳を記す<sup>13)</sup>。

教え子のために身を捧げた先生

台風圏内の戦慄すべき惨状

昨日の恐ろしき台風禍の死亡者数は驚くべき数を示し、尚詳細は不明であるが、これ以上大きくなるかも知れない。最も惨状を示した大阪では死者 1067 名、負傷者 3057 名、行方不明 308 名であった。京都では死者 209 名、負傷者 649 名、行方不明 60 名で、台風のコースを外れた東京ですら死者 6 名、負傷者 33 名もあった。各地の犠牲者総数は通信不能のため、今尚判明しない。

大阪において、芦田ますじ（政次の誤り）先生は英雄的な行為によって数百の学童を救助したのである。先生は恐ろしい台風が近づいていることを知り、安全な場所に児童を避難させようと努めた。先生は暴風の吹きすさぶ真ん中でほとんど超人的な努力によって扉を押し開き大部分の生徒を戸外の安全な場所に避難させることができた。しかし、先生自身は倒壊した校舎の下敷きとなって、痛ましくも惨死されているのが発見された（以下、略）。

※ドイツ語訳については『大風水災学園美績』を参照し、現代文に直した。また、立命館大学ドイツ語講師 Simon Oetle 先生の助言を得た。

## 6 災害後の防災・復興について

### (1) 復興計画（鉄筋校舎の建設）

室戸台風によって、大阪市小学校の 70% 以上で校舎が倒壊し、甚大な被害を受けた。これを教訓とし、将来に起こりうる地震・火災にも安全な鉄筋校舎の建設計画が作成された。

大阪市復興事業計画

大阪市会は昭和 6 年 12 月 14 日大阪市復興事業綱要を満場一致を以って通過させた。

教育事業費として 3320 万円を計上し、そのうち小学校復興費に 2860 万円、5 カ年継続事業とした。倒壊、傾斜、大破した被害小学校は 176 校、約 14 万 2000 延建坪の改築を行なう。鉄筋コンクリート建 8 割、木造 2 割とした。また、小学校設備費として 150 万円を計上、昭和 8 年か

## Ein Lehrer opfert sich für seine Schüler

Neue Schreckensmeldungen  
aus dem Taifungebiet

Sonderdienst der „D. N. Z.“

Osaka, 22. 9.

Die Totenliste der furchtbaren Taifunkatastrophe des gestrigen Tages zeigt erschreckende Ziffern, die noch immer im Anwachsen sind und noch weiter steigen dürften. Osaka, das am schwersten gelitten hat, meldet allein 1067 Tote, 3057 Verletzte, während 308 Personen noch vermisst werden. Aus Kyoto werden 209 Tote, 649 Verletzte und 60 Vermisste gemeldet. Obgleich die Hauptstadt Tokio nur von den Ausläufern des Taifuns getroffen wurde, sind dort ebenfalls sechs Tote und 33 Verletzte zu verzeichnen. Die Gesamtzahl der Opfer ist noch nicht zu übersehen, da die Verbindungen mit den betroffenen Orten noch unterbrochen sind.

In Osaka hat ein Schullehrer namens Masuji Ushida durch sein heldenmütiges Verhalten das Leben von mehreren hundert Schülern gerettet. Der Lehrer sah das nächste Unwetter heranziehen und warnte die Schüler rechtzeitig. Er hielt während des Wirbelsturms unter übermenschlicher Anstrengung die große Eingangstür der Schule offen, so daß der größte Teil der Kinder ins Freie gelangen konnte. Der Lehrer wurde später tot unter den Trümmern der eingestürzten Schule aufgefunden.

Ueber das vom Taifun heimgesuchte Gebiet des mittleren Honbu droht weiteres Unglück hereinzubrechen. Da die Stuen auch die Heberlandleitungen der verschiedenen Kraftwerke zerstört hat, fehlt es den elektrisch betriebenen Wasserpumpwerken an Strom zur Aufrechterhaltung ihres Betriebes. Die Folge ist, daß schon jetzt in vielen Gegenden ein akuter Wassermangel aufgetreten ist. Auch der Ausbruch einer Hungersnot ist zu befürchten, da die auf das Unglücksgebiet verteilten Lebensmittellager des Heeres nur Nahrungsmittel für etwa 200 000 Menschen enthalten, während die Zahl der durch das Unwetter obdachlos gewordenen Menschen weit über ist. (via U. Z.)

資料 2 『アルゲマイネ・ツァイツング』(1934. 9. 23)  
『大風水災学園美績』49 頁

らの継続事業中、新・増築 26 校の木造計画の一部を今回の風水害に鑑み、鉄筋コンクリートに変更した<sup>14)</sup>。

### (2) 暴風警報の規則変更

室戸台風までは、風速 10 m/秒以上が警報の目安であった。風速 10 m/秒では、陸上に対してほとんど被害を与えない。室戸台風を契機として、地方暴風警報の規則が変わり、陸上にも相当の被害を与える風速 20 m/秒以上を目安とするようになった<sup>15)</sup>。

## III. 高潮の来襲とハンセン病外島保養院の流失

### 1 高潮の来襲と浸水被害

大阪湾岸には高潮が押し寄せ、9 月 21 日午前 8 時

第5表 浸水地域の地盤高と浸水深（『大阪市風水害誌』105～109頁）

	地盤高 (O.P) ; A	浸水深 ; B	浸水標高 (O.P) ; A+B
外島保養院 (西淀川区)	1.33 m	3.01 m	4.34 m
中島町五社神社 (西淀川区)	2.05 m	1.77 m	3.82 m
天保山栈橋 (港区)	1.93 m	3.83 m	5.76 m
鶴町住宅・海岸 (大正区)	2.66 m	2.50 m	5.16 m



第2図 大日本陸地測量部2万分1地形図、大阪西北部、明治44年(1911)測量。  
外島は大阪府西成郡北村外島であったが、大正14年(1925)に大阪市に編入され、大阪市西淀川区外島町となった。

14分、天保山で海面がO.P5.1m 迄上昇した<sup>16)</sup>。高波は堤防を乗り越え、大阪の市街地に流れ込んだ。海岸から4kmの内陸部迄浸水し、浸水面積は約49km<sup>2</sup>、じつに大阪市の約26%が浸水した。此花区・港区・大正区のほとんど全部、西淀川区・西成区・住吉区・西区・浪速区の一部が浸水した。

大阪湾岸地帯での浸水は深刻で第5表に示すように、西淀川区神崎川河口・外島、港区天保山等では浸水深3.0mを超え<sup>17)</sup>、大正区鶴町で2.5m、此花区でも伝法町・高見町一帯の低地で2.5mに達し、しかもこれらの低地では排水設備が不完全で、災害後数日を経ても、容易に水が引かなかった<sup>18)</sup>。

## 2 ハンセン病外島保養院の流失

暴風に加え、高潮によって大阪市西淀川区、大阪湾岸にあったハンセン病・外島保養院(第2図)が倒壊・浸水し、第6表に示すように、入院患者数597名中、患者173名、職員3名および家族11名、合わせて187名<sup>19)</sup>が死亡・行方不明となった。

外島保養院の海に面した堤防が全部決壊、北側堤防も数ヶ所決壊し、高潮が押し寄せ、外島一帯は泥の海となった。新旧病舎、本館、職員舎宅のうち鉄筋コンクリート造の治療所および付属のボイラー室などの2、3の建物を除き暴風と高潮によって大部分が倒壊した。浸水深は約3.0m、正門前の堤防に避難した人々がほっと一息入れ



第6表 外島保養院、死者・行方不明数。  
 (『風水害記念誌』2頁)

	収容人員	死亡	行方不明	生存
職員・家族	—	14	0	—
患者	597	162	11	424
計	—	176	11	—

る間もなく、水位は堤防を越えて腰のあたりまで来た。堤防上の松並木や電柱にしがみついて、ようやく一命をとりとめたのであった。

### 3 台風、高潮の状況と保養院の対応

『風水害記念誌』には、多数の職員・患者が書き記した室戸台風の回想が収録されている。それらの中から、患者の回想を資料3に3編紹介する。これらの証言と『大阪朝日新聞 9.22.』をもとに、台風・高潮の状況と外島保養院での対応について述べよう(第7表に要約した)。

#### ・青年団が前夜から警戒

院内の青年団が防災・救助の中心となって活動した。暴風警報がでた前夜から青年団が徹夜で警戒していた(大阪朝日新聞 9.22.)。

#### ・付添看護人による隔離室への避難

21日の朝食後から風が強まり、窓ガラスが割れるなどの被害が出はじめると、畳を窓に立てかけたり、重患者を風の当たらない部屋(隔離1号室)へ運んだ。重患者には付添看護人があり、世話をしていたのであった。

#### ・青年団による救助活動

暴風が荒れ狂い建物が倒壊し始め、青年団のラッパが鳴り響き、青年団・婦人会員が駆けつけ重患者を隔離1号室へ避難させた。重患者が足の踏み入る隙間もないほど集まっていた。屋根がめくれあがり、患者達は悲鳴をあげる。

#### ・高潮の来襲、堤防への避難…高い塀が妨げる。

間もなく高潮が堤防を乗り越え、突き崩して、保養院へ押し寄せた。患者たちは堤防に逃れようと出口へ殺到した。しかし、外島保養院では患者棟は有毒、職員棟は無毒と呼ばれて、出入りを厳しく制限していた。その境界には高い塀があり、出入口は狭く看守が見張っていた。これが患者達の避難を妨げたのであった。阿部禮治は医師に全患者を正門から避難させるよう要求した。邑久光明園の芳山智雄(元外島保養院生活者)は当時を回想し、高潮が堤防を乗り越え、崩壊させて襲ってきたにもかかわらず、看守が戸を開けなかった。若い患者が蹴破って通ったと述べている<sup>20)</sup>。

#### ・堤防を越える高潮…松並木にすがりつく。

高潮で崩されていなかった北側正門前と西側の堤防上を目指して逃れた。重患者の手を引き、あるいは背負って避難した。避難が遅れ波に吞まれる者も多かった。隔離1号室に避難していた多数の重患者は部屋の天井まで達する濁流のため溺死したのである。付添看護人は一人で数名の重患者を受け持っていたが、柴山祐海は3名の盲患者から抱きつかれたが、助けることができなかったのであった。

救助活動を行っていた青年団員、婦人会員も波にさらわれ、溺死する者もあった。重患者の救助に活動した阿部禮治や柴山祐海は運良く建物の屋根にたどり着いて助かったことを体験談に書いている。また、堤防上に避難できた人々がほっとしたのも束の間、水位が次第に増し堤防の天端を越えた。水位は堤防上でも腰のあたりまで水が来たと、中道葩久露が語っている<sup>21)</sup>。人々は濁流に押し流されないように松の木や電柱にしがみ付いた。帯や着物を引き裂いて紐とし、若者は老人と子供を、軽患者は重患者を引き上げて助けた。しかし、一本の木に大勢がつかまっていたため、その重みと濁流の力でつかまっていた木と共に流されていく者も多数あった(『大阪朝日新聞』9月22日)。

外島保養院の患者は災害に対して、お互いによく助け合った。付添看護人はもちろんのこと、婦人会員、特に青年団は救助活動において大きな働きをした。外島保養院では日常的に相互扶助の考え方が浸透し、災害時でもよく救助活動を行なうことが出来た。また、患者とはいえ、ハンセン病の軽患者は普通の健康者と同じくらい元気なのである。患者が看護婦を助けたという話がラジオで放送されたが、そのような出来事は特に珍しいことでは無かったと、職員稲葉定七が語っている<sup>22)</sup>。

高潮のため、外島では3mの浸水深となり、2～3の建物を除いてほとんど全部倒壊した。無事であった建物でも天井近くまで浸水したのであった。生存者の大部分は正門前の堤防上に逃れていた。平均海面より2.1～2.4m高かったが、そこでさえ、腰のあたりまで水がきた。松の木や電柱にしがみついて、ようやく助かったのである。患者総数597名中、424名が助かったのは、患者の助け合いがあったからからである。

### 4 なぜ、悲惨な災害が発生したのか。

#### ・外島は海拔0m以下の低地

外島保養院は大阪湾に面した埋め立て地にあった。大

## 資料 3

入院者 松田一郎（『風水害記念誌』90～91頁）

朝食後、(略)暫くすると風が非常に強くなり、家がミシミシ鳴り出したので、皆して雨戸を押していた。間もなく青年団の非常召集ラッパが鳴り渡ったので、帽子をかぶり広場に飛び出した。(略)11号舎がベシヤンコに潰れているではないか。之を見るなり気が強くなり、嵐など恐くなくなつた。団員は整列して直ちに重病舎に駆けつけ病人を風の当たらぬ一部屋に移した。誰か知らぬが、津波がくるというので、青年団員は各舎に津波がくるから早く避難するように言つて廻つた。(略)1号の不自由舎まで来たら、盲の人が出口で逃げ惑っていたので、背中に負ひ、風呂の前の廊下を通り、炊事場の中を抜け出して、池の辺まで来たら、何時もは綺麗に柳の影を写していた水が、今は濁水となり非常な勢いで盛り上げて行く手をふさがれてしまった。仕方なく看護婦さんの宿舎の前を通り、研究室の傍の廊下を、本館の方へと逃れる途中、危うく水に足を取られる処だった。左手の植込のような所迄来たら、もう水は腰の辺迄きていた。歩行が自由ならず、植木に足を取られて全身を水に吞まれた瞬間、背中の人と離れてしまった。水より顔を上げるなり、付近を見廻したが、その人の姿は見当たらなかった。何げなくフト前方を見れば、4～5間先に樹があり、5～6人抱きついていたので、僕も一枚にすがりついてほつとした。後より流されてくる人でその木は満員になってしまった。水が増えるばかりで、下の方には居られなくなった。屋根の庇と水が同じくらいの高さになっていたの、官舎の屋根迄泳ぎつき、瓦の上を棟迄這つて行つた。水より上があれば寒さが肌をつんざくようである。氷雨は遺憾なくシャツ一枚の背中を叩いて痛む。(略)風で瓦が飛び板が見えていたので、それをはがして天井へもぐりこんだ。同じ屋根に職員の方も十人程居られた。(略)同じ並びの5号舎は何処へ流されたのか影も形も見えない。水に浸つて見えていた家も水の減き際に大部分は倒れてしまった。天井は外より非常に暖かかった。こんな寒いのに自分だけ暖かい処に居るのは勿体ないと思つて近くに居た人達を呼んできて、一ツ処に6～7人水の減くのを待つて居た。(略)十間程離れた重病舎の屋根にも友達が6～7人居つた。少し水が減きかけた時、その屋根が一ゆらぎした時には驚いた。ああ、あの儘水に吞まれてしまふではないか、と思つたが、その儘動かなかったの、ほつと安心した。水が庇より六尺減つたので、屋根より飛び降り五間程ある堤防迄泳ぎ着き、震える足で歩いて見た。自分は助かつたのだと、気がつくと、室員や友達の手が突かれてきた。(略)青年団員2人と一しょに流された人を背負ひに行く道すがら、堤防を見れば今朝迄同じ釜の飯を食べていた兄弟姉妹が、今はもう帰らぬ旅の人となっているではないか。15～16町も行った処に、流される途中義足を失ひ、歩くことが出来ずにいる人、目が見えずに自分が何処迄流されたのかも知らずにいる人達を、背負つて帰つた。正門近く迄帰つて来た兄弟達の死体がずうつと並んでいる。西の端に団服の儘で転がっているのが眼についた。誰かと思つて覆いを取つて見れば、嗚呼何と云ふ悲しい事だろう。今朝ラッパが鳴ると同時に、一所に広場で並んでいた隣の同じ第一班の班員であるY君ではないか。思わず手を握りしめた。その手はもう冷たくなつてゐるのだ。団服姿の儘で最後迄自然の暴威と戦いつつ青年の本分をつくし我等の犠牲になつたのだ。と思うと、暫しは涙がとめどもなく頬を伝うのであつた。(以下略)

入院者 柴山祐海（『風水害記念誌』66～67頁）

(前文略)警報がラジオによって放送されたのであるが、私は今迄幾度も警報を聞いて左程に無かつたのを覚えていたので、今回も余り気にしなかつた。(略)私は永らく重態にある室員の付き添ひの番<sup>31)</sup>に当たつていたので、朝餉を済して隔離室に行つた。(略)数分後、看護人が隔離室を安全地帯と思つてか、一斉に病人を背負つて運んで来た。どうしたのか聞くと、各病院室のガラス窓が破壊され、危険で居れないと言う。さては台風襲来と思ふ間もなく、非常ラッパの響き渡るや、青年会、婦人会員はそれぞれ不自由舎、重病舎の人命救護の任に就いたのである。重病者を入れられるだけ隔離室に避難させたが、皆恐怖心に囚われている。そこに、一陣の台風襲来し、トタン屋根の半分は大音響をたてて飛ばされてしまった。病者は悲鳴をあげて泣き叫ぶ。(略)今迄、北東の風が南西に変わった。長廊下のガラス戸を大勢で支えていたが、これも破壊されてしまった。中野婦長さんは早くから恐れられている病者を慰めておられた。間もなく、誰かが、堤防が切れた、逃げろと言う声が聞こえた。さてはと思ふ間もなく、濁水が凄まじい音をたてて侵入してきた。婦長さんをはじめ、青年団、婦人会等数名は荒れ狂う濁流の中を堤防に避難させるべく運んだのであるが、水は腹、胸、首等忽ちにして窓を塞ぎ、真暗がりとなり、天井まできてしまった。盲の病者三名は私に抱きついてきたが、救い出す手段も方法も尽きてしまった。私はもう駄目だと決心はしたもの、助かるものなら、助かりたいという念願から、天井裏のあるものに手をかけ、水に浮かされつつ、天井板を破り、梁の上に這い上がり、一命を得ることができた。(略)屋根に上り西方に眼を移せば、大船が見える。救助船と思ひ喜んだけれども、一向に動かない。後で遭難船であることが分かつた。(以下略)

入院者 阿部禮治（『風水害記念誌』59～61頁）

(前文略)此の時北堤防を工事中の職人が傘駄天の如く走つて行く様は常事ではなかつた。サテは。激浪の為海岸の堤防は破壊されたか…此の時、病人を如うする、病人を如うすると云う付添の叫び声。暴風に和して聞いた。今は一大事一瞬も躊躇する時でない。全患者を院の前なる堤防に避難さすべく院内に飛び込み保田先生と廊下で会い大至急正門より全患者を避難させよと要求した。此の時は既に海岸の堤防は破壊されていた。何しろ院と患者との境界線は非常な障碍をなして、思う様に避難出来ず、漸くにして破られた数ヶ所より青年団、婦人会、軽症者等は、病者を背負ひ、盲人を引張つて潮の如く押寄せた。入口は修羅場かの如く悲痛の叫び今尚身の奥に残っている。夫れより又引返し病室に行き、隔離一号室に行つて驚いた。重病者殆ど此隔離一号室に集つて足の入るすきも無い有様だ。之は大風の避難所として此所に集つた様である。危険々々濁流は其所まで襲来している。早く逃げよと叫んだ。今折角此所まで避難した多数の重病者の中にも津浪と聞いて又其所を這い出して浪に吞まれた者もあり付添に負われ引かれ乍ら諸共に溺れる者もあつた。青年会や婦人会の手も充分此所まで届かなかつた事は、又已むを得ぬ事であろう。地獄の悪魔は此の憐れなる多数の病者を一呑みにせんと今足下を襲っている。絶対絶命、万事休す瞬間山なす激流に足を捕えられ逆巻く濁水に吞まれて仕舞つた。暫くして水上に浮び上り目を開けて見れば、傾きかけた病舎の屋根に手がついてゐた。無意識になつて登つた。(略)風止み波おさまつて、其の天井を見れば無残や真白にはれ上つた多数の友は続々と現れた。(以下略)

阪府衛生課長は「元来外島保養院は其の位置が西南を受け海に面して居り風に対して全く無防備の状態に在る<sup>23)</sup>と述べている。風に対して弱いというだけでなく、地盤の高さはO.P1.33m<sup>24)</sup>であつたから、大阪湾の平均海面の高さぐらゐしか無かつた。もし、堤防が損傷すれば、平常でも満潮になれば約1m水没する。また、一旦

浸水すれば、排水が困難な場所であつた。周囲には堤防以外に避難場所もなかつた。

・低く、弱い堤防

唯一頼るべき堤防も、大阪湾の平均海面より2.1～2.4m高い程度で、また、強度も充分で無かつた。天保山でO.P5.1mにおよんだ高潮は堤防を乗り越え、海岸

第7表 台風、高潮の状況と保養院の対応、避難  
 参照資料『大阪朝日新聞 9.22』(A)、『風水害記念誌』(B)  
 資料には相違点もあるが、比較検討し、妥当と思われる方を採用した。

台風、高潮の状況	保養院の対応
20日15時に暴風警報出る。	20日夜から青年団が徹夜で警戒していた。(A)
7時30分頃 強風で屋根瓦やトタン等が木の葉のように舞う。(B, 65)	窓に畳を立掛けたりして、風雨を防いだ。(B, p103)
8時頃 建物が倒壊し始める。(B, p65) 隔離1号室の屋根も半分めくれあがる。(B, 67)	付添看護人が重患者の手を引き、あるいは背負って隔離1号室へ避難させる。(B, p66) 青年団の非常召集ラッパが鳴る。(B, p90) 青年団・婦人会員が集合、重患者の手を引き、あるいは背負って隔離1号室へ避難させる。(B, p66) 重患者が足の踏み入る隙間もないほど集まっていた。(B, p60)
8時15分 高潮の来襲。湾岸の堤防が崩れる。水は天井近くまでせまる。(B, p67) 病舎・官舎の大多数が倒壊する。(B, p60等) 院の正面、西側の両堤防も水没し始める。堤防上で腰までの浸水深。(B, p86) 松の木、電柱が人の重みと激しい濁流のために倒され、流される者が多数あった。(A) (B, p60)	院の正面の堤防に避難を始める。(A) (B, p60) 患者棟からの狭い出口に殺到する。(B, p44) 隔離1号室の重患者の多くは逃げ遅れ、波にのまれ溺死した。助けようとした者も諸共に波にのまれたが、建物の屋根上に流れ着くことが出来た者はかろうじて助かった。(B, 91等) 堤防上の松並木、電柱により登る者多数。(A) (B, p77等) 帯や着物を引き裂いて紐とし、軽患者は重患者を引き上げる。(A) 急流に流されてゆく人々を見ながらどうすることも出来なかった。(A) (B, p60)
8時30分頃 水位が下がり始める。(B, p77に約20分程で高潮が引くとある)	患者173名、職員の家族11名が死亡。 看護婦長はじめ3名の職員が殉職する。

に面した堤防を押し崩した。患者・職員の生存者の多くは正門前の堤防に避難したが、水は堤防上でさえ腰付近まで浸し、流されないように松並木や電柱にすがり付いて、ようやく助かったのであった。

#### ・脆弱な木造建築

室戸台風が引き起こした高潮は堤防を乗り越え、押し崩し、外島保養院の建物のうち鉄筋コンクリートの建物(1階建)を含む2～3の建物を残し、その他の建物を全部倒壊させた。外島が海岸の低地であることから危険が指摘されていたのに、脆弱な木造建築しか建てられなかったのである。また、療養所内では患者棟と職員棟の間には高い塀がめぐらされ、通行を遮断したので、避難が遅れ犠牲者が増えたのであった。

#### 5 なぜ、危険な場所に保養院が設置されたのか

##### ・国家による隔離政策

1907年(明治40)年3月、第23回帝国議会で「癩予防ニ関スル件」(「らい予防法」)が制定され、全国に5つの公立療養所を設立することが決められた。当時の日本政府はハンセン病患者の存在を「文明国の恥」と考え、ハンセン病が微弱な発症力しかないにもかかわらず、恐ろしい感染症として宣伝し、患者を感染源として、社会から排除しようとしたのである<sup>25)</sup>。

##### ・療養所は人里離れた場所に置かれる

伝染する恐ろしい不治の病という誤った認識から、療養所はいずれも四方を海に囲まれているとか、幾重にも

外壁を築いた場所に設置された。これは、患者の逃亡を防ぐためであったが、療養所設置に対して地域住民の反対が強く、人里離れた場所にならざるを得なかったこともある。このような立地条件そのものが、ハンセン病に対する恐怖感をさらに助長する結果となった。

外島保養院は大阪府西成郡布屋新田の荒涼とした一角に外島という大字を作って、明治四二年(1909)に開設された。『大阪毎日新聞』(1909.4.21)は、次のように記述している。「布屋新田という野菜どころの一方へ此の種の療養所を建設して布屋病院などと呼ぶのは如何にしても布屋農民に気の毒の感じがするので、同院の敷地二万坪を限って外島という大字を作ったものだが、南は海、東は神崎支流、西は左門殿川、北は松並木の堤防を以て限られた此の一区画は誠に外島の名にふさわしい。茅葺の浜辺の絶域で最も近い尼崎からも南へ一里は隔たっている。」

この記事から当時の人々のハンセン病患者への偏見を窺い知ることができるのである。

##### ・安全な場所への移転計画－住民の反対で挫折

大阪府内でも人里から隔たった地に保養院が置かれたのであるが、外島はいわゆる海拔0m地帯で、高潮・地震などの災害に対して弱く、危険であることが当局にも認識されるようになり、安全な場所への移転が検討された。1926年、大阪府は泉北郡北神谷・美木田村への移転計画を公表したが、地元住民の反対運動が激化し、実現できなかったのである。

移転が無理なら、全員が避難できる広さのある3階建程度の鉄筋の建物があれば、このような惨事を防ぐことができたのである。

## 6 被災後の外島保養院

### (1) 外島保養院への救援活動

9月21日、正午、かなり水は引いたが、一面の泥沼。海に面した堤防が崩れてしまっているため、潮が満てくると水位が上昇した。

午後、溺死体の引き上げ、不明者の捜索が数日にわたって続いた。

職員が中島町や尼崎の商店から食料品を買い集め、院内青年団員が食料を重患者の許に運んだ。

大阪府庁から飲料水・食料品・毛布・蒲団の配給を受ける。

この日の食事は握り飯1個程度であった。

夜、正門前の堤防上で一夜を明かす。府から支給された毛布・蒲団を分け合って寒気を防いだ。焚き火で暖をとる。

22日 午後、外島保養院から数町東北方、中島橋畔砂丘上に天幕を張り、患者を収容。

朝日、毎日両新聞社から救援物資が届く。

24日 大島療養所(香川県)は「神懸丸」<sup>かんかけまる</sup>を借り切って第一回目の救護班が午後6時に到着、直ちに外島の患者99名を乗せ、長島愛生園(岡山県)へ49名、大島療養所へ50名を送致した<sup>26)</sup>。

その後、全生(東京都)、九州(熊本県)、北部(青森県)、粟生(群馬県)の各療養所にも患者を委託した。10月21日に粟生に58名を送致したのを最後として生存患者全部を委託し終わった。最終に移送された患者は1ヶ月間天幕生活を余儀なくされたのであった。

### (2) 被災後のハンセン病政策と療養所

被災後、外島保養院の復興を患者・職員ともに願っていたのであるが、大阪の地に保養院が再建されることもなく、1938年(昭和13)4月岡山県長島の西端に名称を光明園と改め復興された。その後、1941年(昭和16)国立に移管され、邑久光明園と改称され現在にいたっている<sup>27)</sup>。

新薬プロミンの開発によって、ハンセン病が完治する病気となったが、政府は1953年(昭和28)「らい予防法」を制定し、戦後もハンセン病を恐ろしい伝染病として、患者を強制的に隔離する政策を改めなかった。



写真2 外島保養院記念碑

1996年(平成8)、「らい予防法」が廃止され、1907年以来、約90年間続いた強制隔離政策によりやく終止符が打たれたのである。

1997年、外島保養院があった地に、邑久光明園自治会によって記念碑が建てられた(写真2)。西淀川区中島2丁目、バス停新中島橋から進行方向に徒歩約5分、「フェニックス大阪、大阪湾広域環境整備センター大阪事務所」の手前、中島川(神崎川の分流)の堤防フェンスの中にひっそりと建っている。周囲は工業団地で、平日は大型トラックが頻繁に走っている場所で、訪れる人はほとんど無い。毎年9月末に邑久光明園、府・市の関係者によって慰霊祭が行われているが、2009年度は9月26日に実施された。

## IV. ま と め

室戸台風によって、大阪市では実に70%以上の小学校で校舎が倒壊し、甚大な犠牲者を出してしまった。監督官庁に対しては厳しい批判が新聞等で報道された。この災害を教訓として、以後、校舎の鉄筋化が進み、学校は生徒が安心して学べる場、また、地域住民の避難所としても役立てられるようになった。東京・横浜では関東大震災以後、校舎の鉄筋化が進んだのであるが、大阪では11年遅れたのであった。

警報の出し方についても改善が行なわれ、教育者はもちろん、一般市民も警報に注意するようになった。被災2年後、全国の人々からの寄付金によって犠牲となった児童・教職員を慰霊するため教育の塔が建立された。室戸台風の教訓がよく生かされ、多くの改善が行なわれたといえる。

しかし、ハンセン病患者への対応は決して改善されなかった。暴風と高潮によって、外島保養院が流失、多数の犠牲者が出たことが新聞で報道され、国民の同情を集めたのは確かである。しかし、外島が大変危険な場所に立地していることは事前に認識されていたが、安全な場所への移転も行なわれず、鉄筋コンクリート造の病舎が建設されることも無かった。この悲惨な出来事に対して、監督官庁の責任が問われることも無かったのである。ハンセン病患者の強制隔離の政策、言い換えれば、患者を絶滅させる政策がこの悲劇を生んだのであった。

近年になって、ようやく「らい予防法」が廃止され、ハンセン病療養所は強制隔離施設ではなくなった。今後の療養所のあり方も考えられている。療養所と市民の交流が一層進んで行くことが望ましい。そのためには、ハンセン病に対する正しい理解、知識の普及がさらに必要である。

なお、本稿では論じなかったが、室戸台風による高潮によって大被害を受け、以後、大阪市は地盤沈下に対する本格的な調査を開始した。その原因は地下水の過剰な汲み上げによって、地下水圧が低下し、軟弱な粘土層が収縮を起こして、地盤沈下が起きることが明らかとなった。しかし、効果的な対策が実施されず、地盤沈下はその後も一層進んだのであった。1961年に大阪を襲った第二室戸台風による高潮で中之島周辺のビル街が浸水するに及んで、ようやく効果的な対策が行なわれるようになり、地盤沈下は終息した。しかし、いったん沈下した地盤は元にはもどらず、現在、大阪市内の海拔0m以下の地域は48平方キロに及んでいる。大阪湾岸を高潮から守る堤防については、築40年以上経過している箇所が20%にのぼる<sup>28)</sup>。堤防が破壊された場合、室戸台風をはるかに上回る浸水が起きると推測される。

また、現在、大阪市内の公立小中学校校舎はすべて鉄筋コンクリート造となっているが、1981年建築以前の建物で耐震性が不足するものがあり、耐震補強工事が進められている。大阪市内公立小中学校の耐震化率は校舎の総棟数の87.6%である<sup>29)</sup>。2015年までに耐震補強工事の完了をめざしている<sup>30)</sup>。

#### 注

1) 大阪市『大阪市風水害誌』、1935、91頁。ただし、75%とあるが、72%に訂正した。

- 2) 大阪市『大阪市風水害誌』、1935、149～150頁。
- 3) 大阪市『大阪市風水害誌』、1935、91頁。ただし、同書160頁では、児童死亡251名等、91頁の記載より少ない。91頁の数字を採用した。
- 4) 大阪市『大阪市風水害誌』、1935年、152頁。
- 5) 大阪市教育会『大風水災学園美績』、1935、101～104頁。
- 6) 大阪市立天王寺小学校創立100周年記念誌編集委員会『天王寺』、1974、14頁。
- 7) 堀口由己「台風」堀口由己他『防災科学「風災」』、岩波書店、1935、48～49頁。
- 8) 青木滋一『大阪の四季と災害』、育文社、1950、68～72頁に辰巳善之助の回想が所収されている。
- 9) 『大阪市風水害誌』65頁に、「正午には奄美大島南東約100キロ弱のところに位置した。この頃時速約30キロで進路を北北東から北東に転じた。近畿地方は20日夜より暴風雨圏内に入ることが明らかとなった。」とある。
- 10) 青木滋一『大阪の四季と災害』、育文社、1950、69～70頁。
- 11) 青木滋一『大阪の四季と災害』、育文社、1950、70頁。
- 12) 青木滋一『大阪の四季と災害』、育文社、1950、70頁。
- 13) 大阪市教育会『大風水災学園美績』、1935、47～49頁。
- 14) 大阪市教育会『大風水災学園美績』、1935、14～15頁。
- 15) 堀口由己「台風」堀口由己他『防災科学「風災」』、岩波書店、1935、48～49頁。
- 16) O.Pとは、明治七年中、大阪天保山での最低潮位。O.P + 0mは1934年当時、平均海面より、1.05m低い。
- 17) 大阪市『大阪市風水害誌』、1935、106～107頁。
- 18) 西淀川区役所・横江慶次『災害誌』、1951年、西淀川区役所、111頁。ただし、奥付の書名は西淀川災害誌。
- 19) 第三区府県立外島保養院『風水害記念誌』、1935、2～3頁（『近現代日本ハンセン病問題資料集成（戦前編）』4、不二出版、2002、所収）179～180頁。
- 20) ハンセン病をどう教えるか編集委員会『ハンセン病をどう教えるか』、解放出版社、2003、114頁。
- 21) 第三区府県立外島保養院『風水害記念誌』、1935、86～88頁（『近現代日本ハンセン病問題資料集成（戦前編）』第四卷、不二出版、2002、所収）208頁。
- 22) 第三区府県立外島保養院『風水害記念誌』、1935、45～48頁（『近現代日本ハンセン病問題資料集成（戦前編）』第四卷、不二出版、2002、所収）197～198頁。
- 23) 第三区府県立外島保養院『風水害記念誌』、1935、2頁（『近現代日本ハンセン病問題資料集成（戦前編）』、第四卷、不二出版、2002、所収）179頁。
- 24) 大阪市『大阪市風水害誌』、1935、106頁。
- 25) 藤野豊「解説—近現代日本ハンセン病問題資料集成補巻1.2の構成」（『近現代日本ハンセン病問題資料集成（補巻1）外島保養院年報（上巻）』、不二出版、2004、所収）1頁。
- 26) 第三区府県立外島保養院『風水害記念誌』、1935、154～160頁（『近現代日本ハンセン病問題資料集成（戦前編）』4、不二出版、2002、所収）225～226頁。
- 27) 藤野豊「解説—近現代日本ハンセン病問題資料集成補巻1.2の構成」（『近現代日本ハンセン病問題資料集成（補巻1）外島保養院年報（上巻）』、不二出版、2004、所収）2頁。
- 28) 朝日新聞、2009年9月25日夕刊。
- 29) 2008年4月、文部科学省調査による。大阪府下の公立小中学校校舎の耐震化率は56.9%である。
- 30) 大阪市防災会議『大阪市地域防災計画 震災対策編』、2008年、40頁。
- 31) 4人1組で、16人の重患者の付き添いを行なった。24時間、365日を交代で世話していた。医師は8時間勤務。看護婦や看護士は無毒地帯の当直室にいた。医師・看護婦は治療や検温の時だけやって来て、終了したら直ぐに引揚げた。